

患者情報を共有し、地域医療の充実と向上を図る

「あまくさメディカルネット」を運用開始

天草地域医療センター

原田 和則 院長に聞く

天草医療圏の医療機関をネットワークで結び、画像データや各種検査などの患者情報を共有するICT（情報通信技術）医療連携システム「あまくさメディカルネット」が、今年8月からスタートした。このシステムは天草郡市医師会・酒井一守会長を中心にインターネットを利用し、医療機関同士が連携を深めることで、医療現場での救急搬送の判断をはじめ、診療時に検査の重複を避けるなどの患者負担の軽減や治療の効率、質の向上を図っていく。メディカルネットの中心に位置し、天草医療圏の拠点病院である天草地域医療センター（天草市）の原田和則院長に運用状況や今後の展開についてインタビューした。（取材 櫻木）

天草地域の医療機関52施設が参加

インターネットを利用した患者情報を共有する医療連携システムがスタートしましたが。

原田院長 天草郡市医師会を中心に

インターネットを利用して、天草医療圏の医療機関をネットワーク回線で結び、画像データや患者情報を共有するものです。この「あまくさメディカルネット」は、医療機関同士の連携を強化し、中核病院の診療体制や地域医療の充実と向上を図るため設立したもので、今年8月から

システムの運用を開始しました。10月末現在で、地域の医療機関の半数を超す52施設が参加しています。

地域全体でのネットワークの構築は全国的にも珍しいようですが、設立の背景は。

原田 天草市、上天草市、若北町のいわゆる天草地域は、天草五橋が開通した後も、熊本市内まで自動車2時間を超えるエリアになっています。例えば熊本市内に入院することになると、患者さんも大変だし、

家族も大変なことになります。家を出て1週間も2週間も泊り込まなければならぬし、その間の仕事も中断することになります。また天草の医師も熊本の病院に連絡を入れるなど大変です。天草の医療圏の中で、ある程度は完結していかなければなりません。熊本市圏だけでなく各地域に住む人々が平等な医療を受けられなければならないし、医療難民になってはいけません。

天草地域も高齢化が進んでいる。

原田 日本は、世界中のどの国もこれまで経験したことのない高齢社会を迎えており、中でも熊本県は高齢化率65歳以上が全国の先を走り、ここ天草医療圏の高齢化率は35%、その独居率は6割と極めて高く、さらにその先を進んでいる。これは4人に1人が75歳以上という超高齢社会が到来する2025年問題を飛び越えて、すでに未来を見て



▲昨年増設した新病棟(中央)。右奥上が新設したヘリポート

いるわけです。また過疎化が進む地域では、慢性的な医師不足があり、若い医師たちが天草地域への赴任を嫌がっています。医師の人数が多い大病院は別ですが、医師が数人という病院やあるいは診療所では、自分の専門外の患者さんが来た場合に専門外でも診療しなければなりません。こうした医師たちの手助けをする必要があります。専門外の診療時の不安を少しでも減らし、安心して地域医療に取り組んでもらうためにも、地域で連携をしようというのが発端です。

5つの中核病院と画像データを相互に参照 救急医療の質の向上へ